自信が更に固まった

福田さんと松永さんの復帰で

組合員に新たな決意

福田洋さんと松永学さん（共に宮浦支部）のこんどの復帰は、全砿場に大きな反響を呼び起こし、組合員と家族は改めて、たたかいをすすめる上での自信と団結を強めることができた。このことに対するよろこびを、四山支部の菊川清さん（五十二才）は語った。

「私たちがそのことを知ったのは、その翌る日の入坑ちょっと前、支部役員の情宣でした。そのときのみんなの気持を一言でいうなら、よろこびというよりむしろ『わあー、よう帰ってきてくれたなあ』というおどろきの方が先でした。お互いに顔を見合わしながら、つくづく感心し合ったもんです。

なるほど第二組合員の人たちがわが方に帰ってくるには、よほどの勇気がいることは、こんどのことを見ても明らかです。しかしそれでも帰ってきてもらわなければならんですよ。私たちがしあわせになろうと思うならば、三池のすべての労仂者が一つに団結する以外にありませんからね。

私たち三池労組の組合員は、一時期たしかに、新労組合員の人たちに対して口をきく気持さえもてなかったもんです。それも当然だったでしょう。ですけどそんな感情にとらわれているばかりはダメで、やはり新労組合員の人たちも、三井から苦しめられてきているわれわれと同じ炭鉱の労仂者仲間だ。明日は手をにぎって一つになってたたかわなければできん仲間だ――こう認識すべきだということを、こんどのことからつくづく思うようになりました。だから私たちはこれからは何でも、新労組合員の人々とも話し合ってゆくべきだと思っています。こんどのことから自信がもてて来ました」

この思いは、菊川さんばかりではない。

格別苦しい 職場の新労組合員

いま第二組合員は各砿場で、会社から組合から徹底的におさえつけられている。休憩時間がやってきて、三池労組の組合員がサッサと現場をひきあげても、そんなわけにゆかず、やっぱり現場に残ってもじもじしなければならないほど、強くしばりつけられている。

だからといって反ぱつしようものなら、上にあがればすぐ呼びつけられて、砿制から大メダマを食うという。

いま坑内保安も再びあぶなくなっている。岩粉をまいたり、きれいに整理したりするから「なんじゃろなア」と見ていると、監督官がくるためだったり。そして調子がいいとなると、機械は使い放題。整備など手つかずといったふうで、「とにかくスミさえ出れば、上にあがってから係員の顔がたつ」という声がしきりだ。

「宮浦で帰ってきた二名のように、三池労組に行かないようにと係員が話したそうだ。しかしこんなに安い賃金ではね」と、三川支部二十四分会の砿場新聞は皮肉を浴びせているが、事実その通りで、こんどの二人の人たちの勇気ある行動にはげまされた若い新労組合員の間から「三池労組に帰ろうと思えば、だれでん帰らるるとばいね」の言葉さえ聞かれるようになった。

復帰に大あわて 後続おそれた新労

病気のお母さんつれ出す

福田さんと松永さんが三池労組へ復帰したことから、会社・新労側は将来これに必ずつづく人々がでることを余程おそれたと見え、相等なあわてぶりだった。それがあとさきのこともわきまえないといったふうな、気違いじみた脅迫圧迫となってあらわれた。

すでに福田さんの身辺に対して新労・会社側から加えられた圧迫の数々については伝えられたが、その後明らかとなったところによれば、松永さんの身辺にも福田さんの場合に劣らぬ圧迫・脅迫が加えられたのだった。

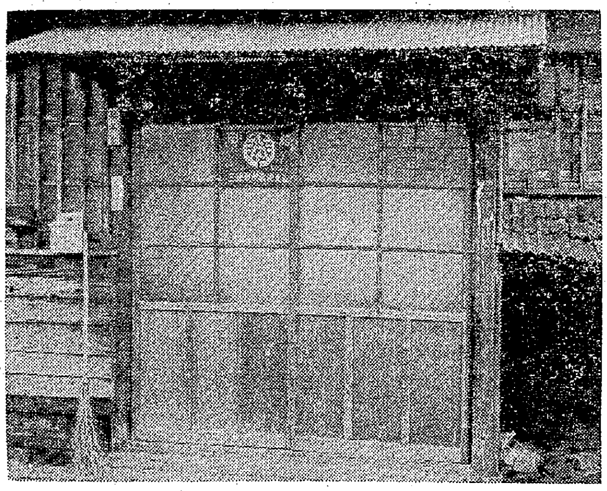
松永さんが三池労組へ復帰するとの態度を明らかにした日から二～三日後、奥さんの綾子さんのお母さんは、中風を病んでいるためよく歩けもしない体を、吉野の家に横づけにされた会社側の自動車にかかえこむようにしてつれさられ、市内の某旅館に押しこめられ、自分の娘婿の松永さんがもう一度新労に帰るように、仂きかけることを強制された。

それどころではない、市内の一下請企業に仂いている兄さんまで勤務中の場所からなんとかかんとか名目をつけられてひったてられ、思いも寄らぬクビのおどしさえかけられて、松永さんつれもどし工作への協力を強制された。

新労・会社側の悪ラツな圧迫はさらに松永さんの友人の家庭にまでおよび、知ればあいた口がふさがらないような、恥ずべきことを行なっている。

しかもその間思いもよらぬデマをまきちらしている。「松永の家はいま三池労組の組合員が取りまいている」「金を十五万円ももらっている」…こんなことはまだいい方だろうが、とにかくこんどのことをめぐり事実をもって示された新労・会社側の卑劣さにはあきれてものがいえない。

これに対して福田さんと松永さんの決意は当然ながら固まるばかり。かねては口かずの少い松永さんも、話がそのことになると憤然たる面もちで語るのである。



その日から、三本線入りの小旗が輝いている松永さんの家の玄関

松永さんの話

「あれ以来、砿場は同じ採炭でも、青電気は私を全然払につけんですよ。だから、次の給料からは相当へるでしょうが、私としては収入がへって、生活が苦しくなることは前から承知して復帰したっですけん、何ちいうことはなかですたい。ばってん向うの組合の者からすれば、このことはとても理解でけんでしょう。ですけん、松永はおうかた金をもらったに違いなか、ということになるとでしょうね。

新労にいるときは、三池労組がストライキう日は、あがってくる坑口で新労の幹部から、二十四時間ストのときはタバコ一本にキャラメルひと箱ずつもらったですが、そのタバコもいこいでしよう。だから新労組合員の間には『ハイライトなんかくれきりゃせんくせ…』といった不満もでるとですが、それをどうしても声にしきらんとが新労ですたい。

新労側はデマばっかりまきちらして、そのため女房がどげん困ったですか。とにかく新労のやり方のきたなさを、こんどというこんどはつくづく思い知ったですよ。これから生活も苦しかばってん、がんばっていきます。賃金をあげてもらうつもりで新労に落ちていった人が、いま押しつけられる重労仂でどげん苦しんでいるか、私は知っているですけんね、だまされんですよ」。

誤記おわび

▼本紙前号二面記事で、こんど三池労組に復帰してきた福田洋さんと松永学さんの住所を、取り違えておつたえしましたので、次のように訂正させていただきます。

福田さん「勝立町紅葉ガ丘社宅」

松永さん「勝立町宮ノ前社宅」

また福田さんの年令も、二十五才を二十七才と誤っておつたえ致しました。おわび致します。

―編集部

天引き税金が増加

社会保障含め 来年は月収の一割へ

年末一時金を手にした労仂者が一様に憤慨するのは、額の低さもさることながら、天引きされる税金の重さ。別表は実収入に対する税金や社会保障などの労仂者が自由に使えない非消費支出の年度別の大きさを示したもの、一目りょうぜん、年々ふえている。この数字には商品のなかに含まれている間接税ははいっていないので、実際の税金の負担はもっと大きくなる。

ところで、政府は来年の国会に健康保険のかけ金値上げを考えている。四十年度でさえ、実収入の九%を占めたのだから、一〇%を越えるいきおいになることは間違いないだろう。政府はこの税金と厚生年金保険の積みたて金などを大独占資本に財政投融資として貸しつけ、独占資本は「国際競争力の強化」などといって「合理化」資金に使い、労仂者を首切り、労仂強化などでおどす。税金や社会保障費で生活を圧迫された労仂者は二重に生活をおびやかされることになるわけ。

春闘共闘委員会は来春闘には大幅賃上げ要求とともに、物価値上げ反対、減税要求をたたかうことを決めた。同志社大学の大島教授は「勤労者の税金が不当に重いこと」「源泉徴収は憲法違反である」と国家を相手どって訴訟を起こしている。給料日のたびに憤慨する気持ちをたたかいに組織し、重税内閣に抗議しよう。

別表　年々ふえる税金負担

	非消費支出計	税金	社会保障
36年度	7.4%	9.4%	2.8%
37	7.8	4.7	2.9
38	8.3	5.1	2.9
39	8.4	5.3	2.9
40	.04	5.5	3.3

（人口五万人以上の都市、勤務世帯）

★春闘共闘委員会「賃金白書」から

おねがい

このところ砿場や地域でかなりの数の新聞（ガリ版ズリ）が、発行されていることを知っています。それは願ってもないことですから大いに発展させましょう。どうか本部の編集部にもお送り下さい。経験を交流しようではありませんか。

編集部

私の書棚

毛沢東 その詩と人生

三川支部　月野貞信

毛沢東の文章は、読みやすく独習書にはもってこいである。しかし、選集にみられる如く、ものすごい文量であり、読むことさえ簡単にいかない状態で、実行の段になるとますます思うようにいかない。

更に「すぐれた行動者と非行動者の間は目もくらむほどの距離があり気が遠くなるほどの断絶がある」しかし、一歩でも二歩でも歩く努力だけは捨てるわけにはいかない。コマギレに読んだ、キレギレの記憶を、この本で、一本の糸のようにつなぐことができ、一つの満足感をえた。

著者があとがきでいうように「彼は詩人だと自称したことはなかった。彼が詩を作りつつあることすら、中国の文学者たちの多くは知らなかった。彼はひたすら行動した。魯迅も茅盾も郭沫若もとうてい及びがたい徹底的な行動を、絶えることなく続けた。もしも彼が一瞬でも行動をやめたならば、彼自身も彼の仲間も、生きることをやめねばならないのだ」という緊迫した、動きのなかの毛沢東をとらえ、一つ一つの詩が生まれてくる根源となった行動、歴史的推移、背景を持って、詩と詩をつなぎ、無名詩人として扱いながら、この詩から何を引き出すか、やってみようというねらいを持って書かれた。

この本の構成は、三十七首の詩を十節の文章の中に埋め、解放闘争の戦場である、長沙、武漢、井岡山、瑞金及び二万五千華里の長征延安、国民党との解放闘争、中ソ対立の中で、毛沢東と七億の国民がどのように生きたかをうきぼりにしている。

特に、私がひかれるのは、楽観的に生きる人間像を知る上で「一つの火花も広野を焼きつくすことができる」（選集、第一巻、三一書房、二二〇円）の論文にもみられる如く、科学的な分析によってみごとにえがかれているが、この本でも一つの山場になっている。

（毛沢東　その詩と人生　著作者　武田泰淳、竹内実　文芸春秋社　九〇〇円）